



## NCFの新採用でさらなる進化を遂げた フルテックのフラッグシップRCA/XLR インターコネクトの魅力を探る

フルテックの最高峰ケーブル「Lineflux」シリーズ。そのRCA、XLRケーブルともに特殊素材NCFを採用した新プラグの開発で刷新され、大幅な進化が実現した。電源周りのプラグや端子での大好評を受け、さらに信号系のプラグへとラインアップを広げてきたNCFの導入で、音の表現性と魅力はどのような飛躍を遂げたのか。新製品と従来のモデルとをそれぞれ比較し、進化の度合いを検証することとした。



Text by  
**山之内 正**  
Tadashi Yamamuchi  
Photo by 田代法生



### FURUTECH Lineflux NCF (RCA)

RCAインターコネクトケーブル  
¥225,170 / 1.2mペア (税込、左奥)

### FURUTECH Lineflux NCF (XLR)

XLRインターコネクトケーブル  
¥255,530 / 1.2mペア (税込、右手前)

フルテックのNCFは静電気対策の切り札として絶大な信頼を集め、本誌読者にはおなじみの存在だ。そのNCFを導体ピンやハウジングの内部に組み込むことで静電気対策と振動対策を同時に高めたLineflux NCFシリーズにXLRタイプが追加され、RCAに加えてバランス接続でもNCFの効果を体験できるようになった。RCAとXLRのLin

新設計NCFプラグの効果をRCAとXLRで比較試験

#### Specifications

##### [Lineflux NCF (XLR)]

〔ケーブル部〕●導体：単芯α(アルファ)OCC導体1.3mm×1●シールド：2層●絶縁：誘電体：高級ポリエチレン●共振減衰材料：シース内のナノセラミック/カーボンパウダーコンパウンド●ケーブル径：約13.0mm  
〔XLRプラグ部〕●導体部：純銅素材のα(アルファ)導体、非磁性ロジウムメッキのワンピース構造の導体ピン●ボデー部：特殊な「NCF」共振減衰素材(ナイロン/グラスファイバー)にナノサイズの結晶性セラミックパウダー&カーボンパウダーを調合)を耐熱性NCF液晶ポリマー樹脂と組み合わせ●ハウジング：マルチマテリアルハイブリッドNCFカーボンハウジング(外側のハードクリアコートとその下のハイブリッドNCFシルバーマッキ3kカーボンファイバーの別の層で構成)、内部は非磁性ステンレスハウジング●導体線結線方式：ネジ止めまたはハンダによる結線●適応最大ケーブル径：10.0mm●CF-601M NCF (R) 適応導体ワイヤーサイズ：燃線→14AWG (2.08sq.mm) MAX. 単芯→12AWG (3.3sq.mm) MAX. 線径→2.1mm MAX●CF-602F NCF (R) 適応導体ワイヤーサイズ：燃線→13AWG (2.62sq.mm) MAX. 単芯→12AWG (3.3sq.mm) MAX. 線径→2.4mm MAX●CF-601M NCF (R) サイズ/質量：全長約18.6φ×64.6mm、約46.9g ●CF-602F NCF (R) サイズ/質量：全長約18.6φ×70.85mm、約58.2g

##### [Lineflux NCF (RCA)]

〔ケーブル部〕●XLRと共通 (RCAプラグ部) ●プラグ外径：全長約φ14.0mm×54.0mm



NCFを採用の最新モデル「Lineflux NCF (RCA) / (XLR)」。新開発RCAプラグ「CF-102 NCF (RCA)」と、XLRプラグ「CF-601M NCF (R)」(オス)「CF-602F NCF (R)」(メス)は単売もされる。導体ピンはいずれもロジウムメッキ。XLRプラグがネジとハンダの両方の結線に対応する点も注目



NCFを使用していない従来モデル「Lineflux (RCA) / (XLR)」(¥195,800/¥222,200、各1.2mペア・税込)。ケーブル導体は新旧とも、加熱鋳造型連続鋳造法「O.C.C.(Ohno Continuous Casting)プロセス」による連続単結晶OCC銅素材に、フルテック独自の $\alpha$ (アルファ)プロセスを施した $\alpha$ -OCC導体を単芯で採用

eflux NCFをそれぞれ従来のLinefluxと聴き比べることで、新設計のプラグがもたらす効果を確認することが今回の目的だ。

Linefluxシリーズの信号ケーブルは1.3mm単芯導体( $\alpha$ OCC)を採用していることが特徴で、新シリーズもそこに変更はない。2層のシールド構造に加えてナノセラミック/カーボンパウダーのコンパウンドを加えることで、制振効果を極限まで高める対策も従来から受け継いでいる。

注目すべきはプラグである。RCAプラグのセンターピン、XLR

Rプラグの導体ピンにそれぞれNCFを注入し、さらにハウジングやボディ部分にも適切な配合でNCF材を導入。RCAタイプの場合、センターピンの先端に黒っぽいNCF材が見えることで外観からも区別できる。堅固な制振構造に静電気対策を追加することによって、どんな音質改善効果が生まれるのか、早速聴き比べてみることにしよう。

●RCAタイプでの進化度を比べる

**表情豊かで躍動的になり  
空間情報の向上で立体的に**

まずRCAタイプの新旧比較。従来のLinefluxはヴォー

カルのイメージが立体的で、事前確認した試聴室のレァレンススケールに比べて表情に繊細さがあり、ステージに深みを感じられた。金管アンサンブルでもホルトーンが伸びやかに広がり、トランペットが本来の柔らかい音色を取り戻す。ヴァイオリンソナタはピアノと溶け合う響きが柔らかく、高い音がきつくなならない良さがあ

る。

Lineflux NCFになき替えると、ヴォーカルに僅かに残っていた高音の刺激的成分が消え、しかも発音は鮮明で聴き取りやすい状態を保っている。声の

柔らかい感触とリユートの明確な発音が両立することで、歌の表情がさらに豊かになったような印象を受けた。ブラスアンサンブルは全員が揃って息を吸うタイミングとアタックの関係がよく見えるようになり、躍動的なりズムの形が自然に浮かび上がってくる。ホルトーンの広がりはさらにひと回り大きく感じられるが、トランペットやトロンボーンはベルの形が見えるほどフォーカスがクリアで、アタックに乗るエネルギーの大きさを実感。室内楽はヴァイオリンの楽器メージがホログラフィックに浮かび、ピアノとの空間的なセパレーションが明らかに向上する。ピアノが旋律を弾く背後で分散和音を刻むヴァイオリンの音形が立体的に浮かぶようになったことも、新旧ケーブル間の大きな変化の一つだ。

●XLRタイプでの進化度を比べる

**埋もれていたニュアンスや  
躍動感を著しく引き出した**

次にXLRタイプの新旧比較を進めよう。試聴室で普段使っているケーブルの音を最初に確認し、続いてLinefluxの従来タイプ、そして新しいLineflux NCFの音を確認するとい

う流れで聴き比べる。

従来タイプはヴォーカルに勢いとスピードが乗り、伴奏のリユートは低音弦の響きが深く、装飾音符の音形がくつきり浮かぶ明瞭さがそなわる。金管アンサンブルは和音に混濁がなく、演奏者が10人まで増えても各楽器の動きが埋もれない。室内楽はヴァイオリンとピアノどちらも立ち上がりは俊敏だがアタックに強調感がなく、音がスーッと立ち上がる。

NCFを導入した最新ケーブルは、同じ曲からこれまで気づかなかった発見をもたらしてくれた。ヴォーカルはごくわずかなビブラートなど、微妙なニュアンスが聴き取れるようになり、エモーショナルな表現の説得力が一気に高まる。金管アンサンブルは特にトランペットの音圧感と勢いが強まり、音量を変えていないのに一段階大きな音が出てきた。ソナタは高弦の艶感が増すと同時にピアノの余韻は柔らかい方向に振れて、ヴァイオリンとのコントラストをいっそう鮮やかに描き出す。リズムも含めて動的な振幅が大きくなり、躍動感を引き出す効果が著しい。埋もれていた情報をここまで引き出すインターコネクトケーブルに出会ったのは、今回が初めての体験だ。